慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	一角獣・迷宮・幻想
Sub Title	Unicorn, labyrinth, fantasy
Author	和泉, 雅人(Izumi, Masato)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2016
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.110, (2016. 6) ,p.153 (118)- 160 (111)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2015年度藝文学会シンポジウム「幻想と文学」 開催日: 2015年12月11日 (金) 場所: 慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール 冊子には前からの通しページあり
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01100001-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2015 年度藝文学会シンポジウム「幻想と文学」

一角獣・迷宮・幻想

和泉雅人

ただいまご紹介にあずかりました和泉でございます。

まずは、『藝文研究』第 109 号第 2 分冊の表紙（図 1）をご覧ください。こちらは、私の退任記念号ですが、この表紙の絵は、神秘的／霊的一角獣狩り (Mystische Einhornjagd) というものです。これは 15 世紀に流行った題材で、定番の図像です。こういった図像の背後にあるテーマというか構想のことを、宗教

図 1　一角獣　ニーダーライン地方、1500 年頃

関係者や芸術家は、Defensorium inviolatae virginitatis Mariae（マリアの無傷なる処女性の弁明）と名付けておりますが、マリアが処女懐胎したことを証明するための図像であるといえるでしょう。この作品はタピスリーですが、版画などもあります。マリアの周りには生け垣のようなものがありますが、この生け垣は大抵木や薔薇で出来ており、マリアのいる場所を囲っていることが重要です。垣が無く芝生だけのこともあります。これを一般的に hortus conclusus といい、閉じられた庭、閉じられた園、マリアの胎内などを意味します。この図像は、左にいる大天使ガブリエルが神の委託を受けて、一角獣をマリアの懐に追い立てている構図になっています。一角獣は、角が一本なので「唯一者」を意味し、イエス・キリストを象徴しています。ガブリエルが一角獣を追い立てるために使う犬（本来は垣根の外にいるべきなのですが、今回は中にいる）は、一角獣の貞節や勇気という徳を指すと言われています。また、この図像で一角獣がマリアの懐に入り込んでいるとき、外見上おわかりになりますように、マリアは懐妊しています。当時広まっていたイメージ（共同観念・幻想）によると、一角獣は処女には馴れるが、そうでない女性が来ると角で突き殺してしまう恐ろしい獣と考えられていました。したがってこの図像は、一角獣はマリアが懐妊しているにも関わらず馴れている、すなわち彼女は処女懐胎していると解される訳です。ガブリエルの頭の上にいる小さな人物像は、父なる神です。口からプネウマと呼ばれる息を吐いており、これによりマリアは懐胎したと信じられていました。

一角獣は非常に多義的な象徴系を持っております。その象徴系はイエス・キリストから、悪魔、死へと続きます。一角獣表象のヨーロッパへの流入経路について、研究者たちは比較的はっきりと突き止めております。

一番目の経路は七〇人聖書 (Septuaginta) における誤訳です。紀元前 4 世紀に、エジプトのプトレマイオス 2 世が、72 人のユダヤ人学者をアレキサンドリア近くのファロス島に閉じ込めて、ヘブライ語の旧約聖書をギリシア語に訳せと命じました。その際にユダヤ人学者たちが雄牛 (re'em) という単語をモノケロス (monoceros) とかウニコルニス (unicornis) とか、つまり一角獣と誤訳したとされます。誤訳した原因は分かっていませんが、聖職者たちが雄牛を見たことがなかったためではないかと言われています。これにより、一角獣が聖書を経由してヨーロッパに流入し、宗教的地位を確立したわけです。18 世紀初めまで、聖書真実主義という聖書に書いてあることはみな本当であるという考えがあったため、

一角獣は実在するのだろうと考えられていました。ではなぜ一角獣はその辺にいないのか、という話になります。民話では、一角獣がノアの方舟に乗り遅れたとか、ノアの方舟の後ろを泳いでいたが、その角に鳥がたくさん止まったのでその重みで沈んでしまったとか言われています。いずれにせよ、このようにして一角獣は、七〇人訳聖書から、カトリックの欽定聖書であるウルガタ聖書に入り込み、それをもとにしたルター訳聖書にも継承されました。従って、ルター訳聖書までは一角獣の記述が見られます。

流入経路の二番目は、『フュシオログス (Physiologus、『博物学者』)』という中世のベストセラーであった通俗的啓蒙書です。この本がいつ、どこで書かれたかは全くの謎です。おそらく 2 世紀後半に、アレキサンドリアで書かれたのではないかと言われていますが、成立場所が分からない時は、文化の中心であるアレキサンドリアとされることがままあります。『フュシオログス』は色々な動物、植物、貴石に関する珍しい話を集めたもので、当時非常に流行しました。ここに一角獣も載っていたため、人々に広く認知されたということです。

流入経路の三番目は、ギリシア・ローマ文化由来の旅行記です。クテーシアスは紀元前 4 世紀後半、ペルシアの宮廷に仕えた歴史家ですが、彼はインドに行って一角獣を見た、ロバに似ていた、と旅行記に書いています。しかし、彼は実際にインドに行ったことは無く、当時よくあったように旅行者たちの話をまとめたにすぎません。ただ、一角獣の角が毒消しの作用を持っているという話素を、ヨーロッパに初めて持ち込んだのはクテーシアスです。また、メガステネスという同時代のギリシアの歴史家は、実際にインドに行き、一角獣を見たと報告しています。一角獣の角は螺旋状をしており、さらに一角獣は集団行動を嫌い、単独行動を好むため群れることはないなどと述べています。このような旅行記的断片によって培われたイメージが、ヨーロッパにおける一つの一角獣像を作り上げたと言えるでしょう。

『フュシオログス』の第 22 章に一角獣の様々な形態的・気質的特徴の記述があります。重要なのは、「一角獣は彼女の懐に飛び込み、その乙女は一角獣を馴らしてしまい、王宮のもとへと連れて行く」という点です。この話素は極めて重要です。この女性による誘惑と連行という話素は、一角獣伝説のルーツを遡るための鍵とされており、この話素と一角獣伝説との関係については、これまで研究者たちの努力によってかなりの部分が解明されてきました。英雄や、あるいは異

常な産まれ方によって超人的な能力をもった人間が、女性に誘惑されて能力を失ったり、世俗世界に連れて行かれたりする、というモチーフの淵源は一体どこにあったのでしょうか？　この問題について、リューダースら 19 世紀後半のサンスクリット学者たちによって発見されたのが、マハーバーラタのリシュヤシュリンガ説話です。リシュヤシュリンガは鹿の角という意味ですが、この説話の含む話素は重要です。なぜなら、雌鹿が処女懐胎をして、角を持った英雄リシュヤシュリンガが産まれるからです。そもそもリシュヤシュリンガの父であるヴィヴァーンダカは、厳しい修行を積んでタパス（霊力）を蓄積し、そのタパスによってインドラ神殿が鳴動するようになったため、神々は地上に仙女シャーンターを遣わし、ヴィヴァーンダカを誘惑し、そのタパスを減少させようとしました。ヴィヴァーンダカはシャーンターを見てうっかり精を湖に漏らし、その精を含んだ水を近くの牝鹿が飲んだためリシュヤシュリンガを（処女）懐胎・出産してしまいます。この失敗に懲りた父によって、リシュヤシュリンガは社会から隔絶された暮らしを余儀なくされます。そのためリシュヤシュリンガは父以上にタパスを蓄積することとなりました。しかしタパスを溜め込みすぎると、すでに述べましたように、神対人の力関係が変わるためにインドラ神の神殿が鳴動します。タパスを減らすのに一番いいのは女性を派遣し、彼女に誘惑させることであると言われていましたが、リシュヤシュリンガの場合、インドラ神はもう少し手の込んだことをします。インドラ神は、アンガ国に干ばつを起こし、アンガ王がリシュヤシュリンガを誘惑させるために美女を派遣するよう仕向けたのです。美女はまんまとリシュヤシュリンガを誘惑し、アンガ国の王宮に連れてきて彼のタパス（霊力）を失わせます。そしてそれを見たインドラ神は雨を降らせるのです。こういったことから、「フュシオログス」などのヨーロッパの一角獣表象の源話はこの説話ではないかと言われております。

続いて、リシュヤシュリンガ説話が日本に伝わった場合です。『大智度論』第 17 巻は、中国僧の龍樹が中国語に訳した仏典です。マハーバーラタだったものが、仏典として日本に伝来したのです。『大智度論』は伝来した年代が一番古いものです。話のモチーフはリシュヤシュリンガと同じですが、一角獣ではなく「一角仙人」という名前になっており、獣ではなく人になっている点で異なります。続いて、11 世紀の『今昔物語集』にも似たような挿話があり、全てリシュヤシュリンガに由来しているのは明らかです。このような、伝播した説話の分析

には、それぞれの要素の関係性を抽象化して考える構造分析という手続きが必要です。しかし一角仙人説話の場合、こういった分析を経ずとも、リシュヤシュリンガ説話から伝播してきたことが非常にはっきりしています。

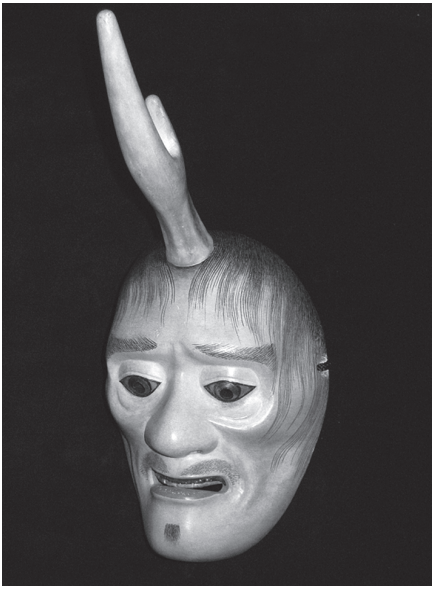

図 2　一角仙人面　作・瀧田琇水

『今昔物語集』は 15 世紀頃まであまり読まれなかったと言われています。すると、金春禅鳳が書いた能「一角仙人」のほうが 15、16 世紀に成立した、日本で最初の、影響力をもった一角獣関連の文学作品となるのかもしれません。『今昔物語集』の方は通力を失った一角仙人を嘲笑う描写がある一方、能の方は好色な描写などの要素を抑えてあります。また、ハンドアウトの一角仙人の能面（図 2）をご覧ください。角が一本生えている特徴的な面です。また一角仙人を誘惑する女性は「センダ」といい、これは明らかにリシュヤシュリンガ説話の「シャーンター」に由来しています。最後に歌舞伎の「鳴神」がありますが、これは 1684 年、六代目市川団十郎が作ったと言われています。「鳴神」は、誘惑のモチーフは同じですが、一角仙人にはもう角が生えておらず、「鳴神」という神になっている点が特徴的です。歌舞伎なので容赦ない仇事の描写が含まれています。

一般的に言って、日本は、インドや西・中央アジアで生まれ東漸した文化の終着点なので、あらゆる文化的イメージが漂着し、溜まってくる場所です。そのため日本と他の文化の比較研究はきわめて実り多いものだと思います。

ここまで我々は 15 世紀の神秘的一角獣狩りを見てきましたが、その伝説のルーツを辿るとマハーバーラタに行き着くというのが、今のところ分かっていることです。

しかし、誘惑・連行のモチーフにはさらに先例があるという研究者もいます。ディーター・シュリングロフらは、『ギルガメシュ叙事詩』が源流ではないかと

指摘しています。たしかに話型から考えると非常に似ています。リシュヤシュリンガほど具体的ではありませんが、エンキドゥを女性（神聖娼婦）が誘惑しウルクに連れて行くというパターンを考慮すると、紀元前 2600 年ころ成立したこのギルガメシュ叙事詩が一番古い一角獣表象の源流かもしれません。しかし、伝播の過程は完全に欠落しているため、話の型だけを頼りに遡ることになり、非常に心もとなく思われます。そこで現存する図像や石像も手がかりに探って行く必要があります。

そもそも一角獣自体が非常に奇妙な獣です。毒消しの機能も変わっております。図像でも非常に色とりどりで、角が赤、黄、青の 3 色ということもあります。一角獣の世界は、調べて行くほど奥が深いものです。

時間もほとんどありませんが、最後に迷宮の話をしたいと思います。迷宮は非常に謎多き存在です。「迷路」は、人を引き込み迷わせるものですが、「迷宮」はこれとは全く異質であり、入口から中心点まで一本道である、というのが研究者たちの共通認識です。迷宮は全世界に散らばっています。螺旋模様や同心円文様といった迷宮類似の図形は一般的で描き易いために広まったのではないかと推測されます。銅鐸にも螺旋文様が見られると聞いています。

cup- and ring- marks と呼ばれるものは、2 万年以上前の新石器時代のものと言われています。このような文様をもつものが、スコットランドやスカンジナビアに数多く残っています。迷宮研究者の間では、形が類似しているので、これが迷宮の元型ではないかと考えられています。しかし、cup- and ring- marks が何を指しているかは、全く分かっていません。一説によると魚をとる網であるとされ、またある説では、女性が子供を産むときの産道を示していると考えられています。実際に人間のような形姿をしたものがそこから出てくる様子を描いたものも残っているようです。現在では、後者の説が有力ではないかと思われています。

さて、そこから 1 万年以上ほど飛びますと、我々の知るところの迷宮図が登場してきます。ハンドアウトに載せたこの図（図 3）は紀元前 1200 年頃のもので、世界で最古の現存する迷宮図といわれ、ネストール神殿で発見されました。そこから発展したのがクレタの迷宮図で、クレタ型は例外的に、円形ではなく方形であるのが特徴です。

では、「ラビュリントス」、「迷宮」の語源は何でしょうか？ 「ラビュス」は諸刃の斧を意味し、そのことから石切場を意味したのではないか、という説もあり

ますが、結局のところラビュリントスが何を意味するかは分かりません。当時、ラビュリントスというと、それが代名詞のように使われた「大建築物」という意味がありました。そのため、ラビュリントスと言ったとき、それは我々がイメージする大迷宮ではなく、単なる大きな墓所建築などを意味しました。そのような混乱のなか、研究者たちは迷宮とは何か、どういう機能があるのか、と問い続けています。世界で一番有用な迷宮研究書は、ドイツ人のヘルマン・ケルンが書いた『迷宮』です。これによると、迷宮の特徴は、一本道である点に求められます。迷宮と聞くと、我々はアリアドネの糸で一生懸命迷わないように辿っていくものを想像します。しかし、迷宮は一本道であるが故に迷いようがないのです。そこが迷路との決定的な違いです。迷路表象・迷路的イメージがいつ出てきたかについては、前 4 世紀、前 1 世紀、あるいは 15 世紀とも言われています。何を迷路と定義するかによっても変化するのでしょう。

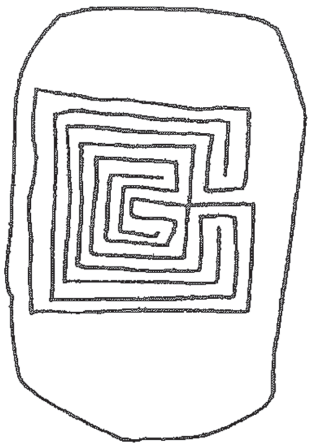

図 3　最古の迷宮図
ネストール神殿、ピュロス、前 1200 年頃

さきほども述べましたが、迷宮が一歩道である、ということは意外と知られていません。クレタの迷宮は、左から入って行く左回りの迷宮であり、それは（例外は多くあるものの）死への回転と言われています。逆に右回りは死から生への回転を指します。タイルで造られるモザイク（床）迷宮は、古代ローマで装飾のために作られ、墓室の前室、入り口に置かれました。モザイク迷宮の特徴は、迷宮の全ての面を歩かなければいけないこと、中心が特権化されていることです。そのため、中心にはミノタウロスやテセウスがおります。

中心とは何かをはっきりと示しているのは、置き石迷宮と教会迷宮です。人々は本当に迷宮の通路を歩いていました。その中心で行われることは、死と再生の行為です。テセウスがミノタウロスを殺して生還してくることは、ミノタウロスという「過去」を殺して新たな「未来」を抱えてやってくるということであり、死と再生の儀礼的意味を持ちます。一方、教会迷宮はキリストの歩いた道をまね

びとして歩くという意味があります。また、置き石迷宮は豊穣儀礼ではないかとも言われています。中心に花嫁を置き、花婿が迷宮の置き石を踏まないように中央の乙女のところへ行き、花婿が花嫁を同じように石を踏まずに連れて帰って来ると、共同体に結婚が認められるというものです。これは紀元前 5000 年以上前からスウェーデンにある迷宮です。こういったものは世界中にあります。

最後になりますが、本シンポジウムのテーマである「幻想とは何か」ということについては、簡単には話せませんが、我々が思うのは、幻想は必ずしも無から出てくるものではない、ということです。自然な物理的法則に反するものが幻想と言われることがありますが、それは歴史的なものです。かつて空を飛ぶことが幻想だった時代もありましたが、今では誰もが空を飛んでいるからです。一角獣にせよ迷宮にせよ、あるいはなんであるにせよ、ある共同体の共同観念・幻想なるものがまず存在し、そこからさまざまな、飛躍した文化的幻想・想像というものが発展的に生み出されてくるのでしょう。

最後は駆け足になって申し訳ありませんが、これで私の報告とさせていただきます。